

SEG 英語多読 授業見学 レポート

圧倒的な英語のシャワー 英語文法も自然に習得

Studying a new language should be done in a fun and natural way!



“多読多聴”という学習方法で、英語4技能を身につける授業を展開しているSEG。辞書を引かずに理解できる程度の英文を大量に読み、リアルな英語を大量に聴くというスタイルが基本だ。前回(10/25掲載)紹介した多読パートでも絵本のCD音声を繰り返し聴いたが、外国人パートでは英語のみが飛び交う授業となる。講師2人の笑いに満ちたやり取りもある中、自然な英語と英文法の基礎を習得していく。

一人ひとりと会話し 英語の世界へ誘う

多読パートと外国人パートがセットになったSEGの英語多読の授業。今回は中1中級クラスの外国人パートを紹介する。

多読パートが終わった後の休憩時間の途中で、授業を担当するTanya先生とNicholas先生が教室に入ってくる。今日のメンバーは、男子5人と女子7人で、さまざまな制服の生徒が入り交じって雑談を楽しんだり、スマホでゲームをしたりしている。

やがて授業開始時刻になると、Tanya先生が「Hello. How are you today?」と一人ひとりに呼びかける。出欠確認の時間だ。生徒の返事に応じて、先生は次々に質問を繰り返していく。ある生徒が「I'm sleepy.」と返すと、Tanya先生はすかさず「Because of P.E.?’とたたみかける。ちなみにP.E.とは体育の授業のこと。数学のmathematicsをmathと略すように、体育のphysical educationをそう略す。こうした日常の英語を生徒は自然に学んでいく。

その生徒が「No.」と答えると、「Why? Because you had a big dinner at Gusto?」と先生。「No.」[At Saizeriya?」「No.」[At Denny's?」「No.」[Jonathan's?」このあたりで笑いが巻き起こる。「No.」[JO-JO-EN?」「No.」[No reason?」「Yes.」[You have been sleepy all day? Wake up!」と一連の会話を終わらせると、次の生徒の名前を呼び「Hello.」こんな形で、生徒一人ひとりに向き合いながら会話を続けていく。髪形を変えたのかとか、夕食に何が食べたのかなど、生徒の答に応じて、Nicholas先生も交えながら、よどみない会話が続く。12人全員の出欠を取り終わるのに10分ほどかかったが、この間に生徒たちは1,000語近くの英語のシャワーを浴び、知らず知らずのうちに英語の世界に誘われていくことになる。

ゲームを通じて 比較表現に触れる

出欠確認が終わると、Tanya先生は、今日のプログラムについて、ゲーム、ホームワーク確認、英作文、フリートークの4つのメニューがあると説明した。

先生はゲームを始めるにあたって生徒を3つのチームに分け、東大、京大、慶應大、大阪大と大学名をあげた後、「Which is No.5?」と問いかけた。生徒たちは口々に大学名をあげ始めるが、しばらくすると「Rock, paper, scissors, 1, 2, 3.」と言ってジャンケンでチームの代表を決め、代表がそれぞれ大学名を答えた。正解は北海道大学だと言うと、生徒からは「なぜ?」「えー?」「早稲田じゃないの?」など、さまざまな声が上がると、先生の基準を示していないが、これはゲーム。生徒たちが興味を持って関わられるような配慮のもとに発した質問なのだろう。

続く第2問は、日本のポピュラーなスナックとして5つのお菓子の名前を読み上げ、「What is the most popular snack in Japan?」。生徒はまた口々に候補をあげながらジャンケン。正解発表の時には「おお」「やっぱりね」などと反応して熱が高まっていく。

第3問は日本の最も人気な職業だ。プロスポーツプレイヤー、心理学者、ライブラリアンレディ、ポリスマンと、そんなにポピュラーではない職業をわざと入れて生徒の興味を引いたうえで「What is a super popular job in Japan?」と質問した。どのチームも正解しない。Tanya先生が「a stupid job」とヒントを出すと、次第に「あー」と分かってきたような雰囲気になる。最後はTanya先生が正解のYouTuberを示した後、チームごとにポイントをつけて終了した。

ホームワークで 比較の表現を確認

ゲームの次はホームワークの確認だ。生徒たちは、宿題として指定されていたワークブックのページを開き始める。そこにあるのは「〇〇は△△よりも〜」という表現の正誤を問う問題だった。文法的に言えば「more+形容詞または副詞+than」で表される英語の比較表現ということになる。

問題を大画面モニターに映し出しながら、Tanya先生は生徒を指名して答

えさせては、正誤を確認していく。最初のゲームでさんざん比較を話題にしたのも、現在学んでいる比較表現をしっかりと身につけるという意図があったことが分かる。

問題の中には、比較する対象として、トマトとタマネギ、BTSとAKB48、BMWと自転車を取り上げ、more expensive than, more popular than, more delicious thanの中から正解を選ばせるものがあった。好みとしか言えない問いもあり、そのたびにTanya先生は、「あなたはどうか?」「あなたの学校ではどっち?」などと質問しては、生徒に答えさせていく。「BMWって何?」というつぶやきを受けて車のブランドの話題になるなど、内容は多少脱線しながらも、比較表現を繰り返し学んでいく。

Tanya先生は、常に何か話している。生徒に質問していることもあれば、Nicholas先生に質問し、2人で意見の相違を確認していることもある。とにかく英語が聞こえない時間がほとんどないほど、エネルギーに話し続けている。だからだろう、どの生徒も2人の先生との会話を心から楽しんでいるように見える。宿題の答え合わせでさえ、正誤は別として楽しい英会話の時間に変わっているからだ。

書く練習に力を入れ 4技能をカバー

次のメニューにいく前に、再び「Rock, paper, scissors, 1, 2, 3.」で席替え。今度はwriting、すなわち英作文だ。Tanya先生は「Do you want a free topic or Tanya's idea?」と生徒に質問。聞き取れなかった生徒に「自由テーマで書くか、Tanya先生が指定したテーマで書くかどっちがいい?」と聞いてみると、説明する生徒もいる。挙手させて多数決を取ると、先生に指定してもらった方がいいようだ。すると、Tanya先生は「I have 34 ideas.」と言い、Nicholas先生に生徒を当てさせ、何番のトピックがいいかを答えさせた。

3人の生徒が指名され、それぞれ9番、6番、8番と答える。9番のテーマをTell your friend: Don't go to my school. 6番のテーマをGive cheating advice. と発表すると、「Cheatingって何?」の声が上がる。先

Teachers should be interested in their students' lives.



生は「Cheating is カンニング」と解説。「どういうこと?カンニングのやり方?」との質問に「That's right!」。とたんに教室が「おお」と盛り上がる。最後の8番のテーマはTell your friend a nice thing about your school. それぞれテーマを伝えるたびに、いろいろな例をあげて、幅広い英語表現を示していくことも忘れない。

3つのどれがいいかを挙手させて8番目に決まりそうになったとき、困ったような顔をしている生徒を見つけたTanya先生は、その生徒に「OK, special bonus number. Give me a number.」と助け舟を出す。生徒が「No.2.」と答えると、My favorite adultというテーマを発表。すると全員一致でこのテーマに決まった。

時間は5分。Tanya先生は消しゴムを使わずにどんどん書くようにと指示し「3, 2, 1, 0!」。教室が一瞬にしてシーンとなり、鉛筆を走らせる音だけが響く。この授業がスタートしてから初めて訪れた静寂だ。やがてタイマーが鳴ると、「Time is up.」とTanya先生。自分が書いた語数と1分間あたりの語数を記入し、Nicholas先生に提出させて、英作文が終わった。

最後のメニューはフリートークだ。生徒が以前描いたと思われるある人物(キャラクター)を示して、男の子なのか女の子なのか、着ているシャツやズボンがniceなのかfashionableなのか、それともlame(ダサイ)のかなどを話題に英会話の時間が15分ほど続く。

だが、単なるフリートークで終わるわけではない。その後はwriting time、つまり今のフリートークで話題になったことを英語で書く課題がある。それまで会話に集中していた生徒は、「あっ、そうだった。書くんだ」と、思い出したように急いで鉛筆を走らせる。さらに、このフリートークに関する簡単な英文を4つ書き取る課題に移る。Tanya先生は一度しか言わず、生徒はそれを聞き取ってプリントに記入し、提出する。

こうして1時間20分の外国人パートの授業が終わった。とにかく耳に入る英語の量が膨大だった。しかも、学ばべき英文法と関連した話題や表現が多く、さらにそうした表現を英語で書き記す時間も豊富に用意されている。多読パートでは主に「読む」力を鍛えられ、外国人パートでは「聴く」「話す」「書く」力を鍛えられる。SEGの英語多読の授業は、まさに英語の4技能が鍛えられることが実感できた。



SEG 英語多読

受講生の声

中1の春から英語多読の授業を受講している生徒のみなさんは、外国人パートの授業に対してどのような感想を持っているのでしょうか。どんな点が楽しいのか、成績向上に役立っているのかどうかも含めて聞いてみました。

学校よりも文法を覚えられ リスニング力も身についた

Tanya先生が主催してくれるゲームが一番楽しいです。中でもギャンブルクイズが最高。正解すれば賭けた数の2倍のポイントがもらえ、負ければその点数が引かれるので、みんなですごく盛り上がりがりながら英語を覚えていけるからです。学校の授業ではあまり文法を覚えられませんが、SEGの授業だとどういうわけかわかれます。おかげで成績も上がりました。

◆ K.H. さん



先生と生徒の距離が近いから 英語を話そうという気になる

外国人の先生は英語しか話ませんが、ジェスチャーなども使って表現してくださるので、何となく言っていることは分かります。だから思っていることを表現する単語が出ないことがあっても、できるだけ意味に近い言葉を選んで話すように努力しています。クラスのほとんど全員と仲良くなれるため、それも英語を話しやすい雰囲気につながっているのだと思います。

◆ K.O. さん



授業に来るのが毎回楽しみ 英語での道案内もできた

Tanya先生とNicholas先生は、いつも2人で盛り上げて楽しい雰囲気を作ってくさるため、この授業に参加するのを楽しみにしています。ゲームで生徒同士が協力する機会が多いので、連絡先を交換するような友人もたくさんできました。外国人の子どもにも英語で道を聞かれてもちゃんと答えられた経験があり、しっかりと英語の力が身についているのを感じています。

◆ Y.N. さん



<https://www.seg.co.jp/>

03-3366-1466

【月～金】14:00～21:00 【土】13:00～21:00
〒160-0023 東京都新宿区西新宿7-19-19

中学1年～大学受験
科学的教育グループ

